

美術の森緑地整備基本構想素案の各項目について(案)

1 素案の項目(章立て)について

- (1) はじめに・・・・・・・・素案策定に至る経過を述べる。
- (2) 現況と課題・・・・・・・・開園日、面積、現況等と課題を述べる。
- (3) 整備の基本的考え方・・ 区の長期計画、パブリシティの再掲をする。(美術館の野外展示スペースとし、美術館が有する文化的イメージを地域づくりに波及させていくこと、そのために、名所ともなるような造りこみをしていく考え方を述べる。)
- (4) 機能・・・・・・・・緑地の機能を述べる。
- (5) 管理手法・・・・・・・・管理について述べる(芝の管理形態、区民ボランティア等との協働による管理の記述および第4回の検討内容を反映)。
- (6) 整備概要・・・・・・・・整備の概要を述べる。
- (7) スケジュール・・・・・・・・今後のスケジュールについて述べる。
- (8) 添付資料・・・・・・・・平面図、作品のイメージ出来る図、策定委員会の経過、名簿等を付す。

下線について、本日ご確認いただく事項となります。

2 「現況と課題」の項目について

現況については、所在地、面積、公園施設などについて記し、合わせて利用の現況を記載する。

課題については下記の点を主たるものとして記載する。

美術館に隣接した「美術の森緑地」であるが、入館動線や館の展示等との関連性、一体性を感じる要素が少ない。

現況では彫刻が1点のみ配置されているが、周辺の樹木の成長などにより、必ずしも緑地のシンボリックな作品として認知されにくくなっている。

壁泉は老朽化しているとともに、機能を停止している。

植栽や高木が生育しているが、ほとんどの範囲は陶板敷きとなっている。みどり 30 計画への寄与および雨水浸透などにおいて、寄与できる余地がある。昼間の利用は、地域の方々の利用が大半であり、区外利用者も多い美術館の特性を活かし、美術館と合わせて集客力を高め、地域の活性化にも寄与することも可能である。

バリアフリーにかかわる法令等に適合していない箇所がある。

管理は美術館とは所管が別であり、美術館との一体的運用において、工夫する必要がある。

3 「機能」の項目について

美術館へのメインとなる動線を確保した緑地とする。

美術館の野外展示、イベント等で利用できる緑地とする。

子どもから高齢者、障害者、区外来館者など、誰でもが楽しめる緑地とする。

野外展示物(彫刻)に触れることから美術に親しめる緑地とする。

まちづくりにも寄与するよう、緑地内ばかりでなく、周辺からも景観等が楽しめるような緑地とする。

現況の樹木は可能な限り保全し、さらにみどりを増やす緑地とする。

文化芸術活動などの区民活動の場ともなるような緑地とする。

耐震性等の安全に配慮した緑地とする。

4 「整備概要」の項目について

< 整備の内容 >

当該緑地においては、既存の陶板を除去し一面の芝生(人工芝等との併用)とする。

既存の樹木については、都市部のみどりは貴重な財産であることを考慮し、伐採や剪定は必要最小限にとどめる。

子どもから高齢者、障害者、区外来館者など誰もが楽しめ、障害者にも心の癒しとなる動物をテーマとする彫刻を中心に配する。みどりとの調和にも配慮した作品とする。

既存の壁泉を撤去し、美術館・図書館の入口に導入するメインエントランスと園路(通路)を確保する。エントランスには壁面緑化の技術を活かしてメイ

ンエントランスに相応しい植物による動物作品(モザイカルチャーなど)を配置する。

メインの園路のほか、利用者の利便性や通り抜けを考慮し、南側・北側からも緑地に入出りできるようサブ的な園路を確保する。

既存の彫刻のある斜面には、「動物感覚をとぎすます道」として、素材や色彩に工夫しながら傾斜をそのまま活かした道を作る。

園内には彫刻作品ではあるが、ベンチの機能をもつ作品を複数設置し、休息ができるようにする。

ユニバーサルデザイン、バリアフリーに最大限配慮した造りこみとする。

< 整備にあたっての留意点 >

形状や大きさ、色彩、動物の種類などについて、全体としての統一性を損なわないよう注意する。

アンリ・ルソーや伊藤若冲などの作品からイメージを借りる際には、安易な模倣品とならないようオリジナリティーを大切にする。

子どもだけでなく、大人にとっても魅力的な、それぞれの童心に触れるような親しみやすい作品とする。

子どもを対象に、設置された彫刻を描き、その絵を美術館に展示するなどの館と一体となったワークショップを検討する。

破損や褪色の際に迅速に対応できる管理を行う。

園路については、素材や色彩を工夫し、歩くのが楽しく雨の日でも滑りにくいものを作る。

配置する彫刻作品等の制作については、区内唯一の美術系大学である日本大学芸術学部をはじめ、練馬区美術家協会等の協力を得て行う。

「美術の森緑地」のキャッチフレーズ等により、美術館と合わせたブランドの形成に留意する。